

ポール・クルーグマン著「自己組織化の経済学 - 経済秩序はいかに創発するのか - 」

ちくま学芸文庫、筑摩書房 2009 年 11 月 10 日刊を読む

1. 経済も自己組織化するシステムである。大都市について考えてみよう。大ロサンゼルス都市圏のような近代都市でさえも、いやむしろ特にそうなのだが、はっきりとした中心部はない。ロサンゼルスのように不規則に広がる都市部は、均質で画一的な集合体ではなく、韓国人街からハリウッド、ワッツからビバリー・ヒルズといった、まったく異質な地域がつなぎあわさっているのである。そして、ロサンゼルスは(ジョエル・ギャロー Joel Garroau の近著 Edge City によれば)、16 もの「エッジ・シティー」(周辺都市)を抱えているが、それらは新しく生まれた商業地であり、それぞれに少なくとも 500 万平方フィート(約 46.5 万平方メートル)のオフィス・スペースがあり、2 万人の労働者を擁している。それらの立地にはかつては低い建物が広がっていたが、突如高層ビルと多階層駐車場にとってかわられるようになったのである。この地域差において驚くべき点は、物理的な地理とは全く無関係だということである。境界となる河川もなく、アクセスの便利さを左右する大きな繁華街もない(確かに、浜辺や高速道路は若干の地理的違いをもたらすかもしれないが、ここは大目にみてほしい)。ロサンゼルスの地域差は、明らかに、各地域がもともと異質であったために発生したのではなく、むしろ自己増強的に発生したものなのである。韓国人は韓国人と一緒にいたいがために韓国人街へと移動し、華やかな人々は華やかな人々と一緒にいたいがためにビバリー・ヒルズへと移動する。そして、ギャローのような観察者が「エッジ・シティー」の発展をたどっていくと、すぐにこれは「自然発火」や「臨海質量」といった概念に近いことに気づくようになる。つまり、彼が表そうとしている現象は、自己組織化システムにほかならないということになる。
2. わたしは、都市のなかにはっきりと異質な立地が自発的に形成される様子から話をはじめたが、これは地域空間における経済的自己組織化の例がわれわれにとって身近なものだからである。しかし、経済には、時間的な自己組織化を生み出すプロセスもある。つまり、比較的安定した長期トレンドを取り巻く、好況と不況の景気循環のことを指しているのである。(もっとも、わたしはコンドラチェフの波は信じていないが)。景気の後退と回復のなかには、石油危機などのような外生的な特定の出来事によって引き起こされるものもある。しかし、長い歴史を通してみると、ほとんどの好況と不況にははっきりとした外生的要因はみられない。もっとも顕著な例は、すべての経済不況の原型である 1929 年から 33 年にかけての景気後退である。それは、あたかも青天の霹靂のように起きた。しかし、それはハリケーンも同様なのである。
3. ここで、不況がなぜハリケーンとよく似ているのかについて説明しておこう。ハリケーンは自己増強するプロセスであり、気流の上昇が水蒸気を吸い上げ、ある高さになると水蒸気は凝縮し熱を放射する。それが今度は気流の上昇を促すのである。不況も自己増強的である。生産の落込みによ

って企業は投資を抑え、消費者は消費を控える。その結果、生産がさらに落ち込んでいく、というわけである。しかし、さらに類似点がある。ハリケーンは永遠には拡大し続けることができない。その凶暴な力の源である水蒸気は、暖かい南洋の上空には比較的豊富に存在する。しかし、ハリケーンそのものは海面の温度を下げてしまうのである。事実、こう考えていくと熱帯低気圧の重要な点は、それが自然による太陽エネルギーの熱帯から温帯への転移である、ということになる。したがって、ハリケーンは、たとえ短期的には自己増強的であるにしても、長期的には自己限定的なものになる。経済不況はどうだろうか。まず物価の低下を、あるいは少なくともデスインフレーションを招き、それがしだいに実質マネーサプライを増やすことになるだろう。深刻な不況で純投資が低下し、あるいはマイナスになると、潜在的に高収益がみこまれるプロジェクトは増えることになる。つまり、たとえ政府が経済を再び活性化させるような慎重かつ効果的な政策を打ち出さなかったとしても、経済不況もまた、自然に回復に向かう自己限定的なプロセスだといえるのである。

4．ところで、天気予報をよくみるアメリカ人なら知っていることだが、ハリケーンは移動しながら勢力を維持し、暖かい海上を新たに通り過ぎるときに力を増している。景気循環にも同じことがいえるかどうか、わたしにはわからない。いずれにせよ、わたしはハリケーンと景気循環の対比が完全に一致するものだとは主張していない。そして読者のなかには、典型的な景気後退で何が起こるかというわたしの描写はあまり正確ではない、といわれる人もあるかもしれない。あるいは、「典型的な」景気後退などをいうものはそもそもないのかもしれない。この場合、不況はハリケーンよりは地震に似ていることになるだろう。この点については第 11 部で触れることにしよう。

P20 ~ 23

[コメント]

不況はハリケーンより地震と似ていると言われたら、ではどうしたらよいかを考えねば、国や世界は、また人々、そして企業は自らの身が守れない。クルーグマン先生の考え方は複雑系だ。

- 2010 年 4 月 27 日 林明夫記 -